

れた。此座談會には各派の作家八十餘名が出席して、新たに、「中國文藝協會」を組織し、「民族文藝」の主張する統一救國運動を支持するに意見が一致した。たゞは一方からみれば、人民戦線が、國民戦線への妥協屈服とも見られるが、また一方からみれば、寧ろ人民戦線が、國民戦線の庇を貸つて母家を取るの作戦に出たのではなからうか。之を要するに最近の文學傾向は、一路「國防文學」へと辿つてゐるのではあるまいか。恰度日本で、「國防研究會」「國防婦人會」が盛になつて行くやうに。

さて國防文學とは一體どんなものであるかといふに、郭沫若は「廣義の愛國主義の文學だ。」「作家の關係の標式で、作品原則上の標幟ではない。」と云つてゐる。實際の作物についてみるに、滿洲上海事變、密輸、綏遠戰爭、農村、帝國主義と妥協する賣國奴等を題目とし、所謂調子の低い「報告文學」にすぎない。

此期の作家としては、舊文學研究會派の沈雁冰（一八九六—）をあげなければならぬ。彼は國民革命後病にかゝり廬山に遊び、癒えて後東京に游學し、一九三〇年上海に歸り、茅盾の筆名で作家生活に入り、一躍文壇の王座に上つたのである。初めの三部作「幻滅」「動搖」「追求」は革命と戀愛とを織りまぜた悲劇であり、後の三部作「春蠶」「秋收」「殘冬」は農村荒廢の過程を描いたものである。「春蠶」はトキーとして上映されたが、文藝作品として映畫化した最初のものとして注目されるべきである。魯迅逝き、郭沫若日本にありて學究生活に入り、文壇の第一線を去りし今日、支那文壇の第一人者として彼を推すに、決して躊躇さるべきではない。

## 現代進歩小説の動向

太田 藤 一 郎

本稿はフィリップ・ヘンダーソン (Philip Henderson) の「現代小説」(The Novel Today, 1926) に據つたものである。

### 一、新しき傾向

吾々の時代の多くの矛盾を根本的に理解しようとする大きな進歩が最近アメリカ文學に現れた。タイムズ・リタライ・サブルメント (The Times Literary Supplement) の如き保守的な機關紙でさへも、一九三六年二月二十二日に發行したあの有名な「American Writers Look East」に於いて、當代のアメリカ小説に親む最も呑氣な讀者でもアメリカ勤勞大衆の生活を研究することが如何に男らしいことであり如何に緊急なことであるかと云ふことを感じてゐるものだ、と認めないわけには行かなかつた。ラルフ・メイツ (Ralph Bates)、ハロルド・ヘスロップ (Harold Heslop)、アレック・ブラウン (Alec Brown) シモン・ブルーメンフェルド (Simon Blumenthal) といつた作家たちの最近の作品を除いては、まだこの國に於いてこの素晴らしい隆々たるプロレタリア文學に比較するものは極めて寥々

たるものである。一九二九年の恐慌は英國よりも餘程烈しく米國の資本主義に打撃を與へたのであるが、この恐慌以來、大多數のアメリカの作家たちは、如何なる幻想を抱いてゐたにしても、知識人としての不羈を喪失してしまつたことは事實である。ジョセフ・フリーマン (Joseph Freeman) が言ふやうに「社會的政治的な主題が他の時代の個人的な主題よりも一層興味あり、重要であり、常態であると云ふ様なことを今日の庶民は經驗してゐる。社會的な主題は今日人達の一般經驗に合致するものである」。ドス・パッサ (Dos Passos)、ウォルド・ツランク (Waldo Frank)、グレゴリス・ラムプキン (Grace Lumpkin)、ジョセフィン・ハブスヘルト (Josephine Herbst)、ワイラ・ヘイチ (Wira Page)、マロリン・ローレン (Marjorie Lawrence)、マイケル・ゴールド (Michael Gold)、ロート・キャントウエル (Robert Cantwell)、ジャック・コンロイ (Jack Conroy)、エドウィン・セイバー (Edwin Saver)、の様な作家たちの深刻なる印象を與へる作品の對照となるべき作品は確かに英國には見當らない。これは、作家と勤勞階級との提携から、又勤勞階級の闘争及び問題が、また作家たちの問題であり、闘争でもありといふ自覺から生じたところの廣く深い一種の文學運動である。大多數の英國作家たちをして、もし彼等が生き延びやうとするなら、彼等の個人的な孤立は最早不可能であるといふことを確信させるためには、英國に於いては、資本主義の更に深刻なる恐慌或は新しい世界戦争——どちらも既にその途にある——を

ば恐らく必要とするであらう。併しながら、この國では廣範圍に亘つて中産階級はフアシズムの味方となつたが、この同情は作家たちを扶けて既に大いにこれを自覺させてゐる。彼等はイタリー、ドイツ、オーストリアの諸國の作家たちの運命を見た、そして同じ運命に置かれることを彼等はさして心配してゐない。兎に角、彼等の或る作家は、政治といふものは自分達の生活圏外の或る物でもなく、單に新聞の不正手段でも政黨のプロパガンダでもなくて、自分達の最も緊密な思想の素材と迅速になりつゝある物である、と云ふことを知り始めつゝある。アメリカ進歩的小説の最も輝かしい先驅者の一人であるドス・パッサは、「マンハッタン・トランスファ」(Manhattan Transfer)の迷へる渾沌状態を経てその「北緯四十二度」(Forty-Second Parallel)及び「一九一九年」(Nineteen Nineteen)の偉大なパンoramaに於いて、殺到する危機に向ふ歴史的發展段階を通じて把握された凡ゆる階級の代表的なアメリカ生活の集合を描寫せんと企てた。必至の劃然たる法則、即ち資本主義社會に於ける階級闘争及び戦争と變革への一般趨勢より見て、始めて彼のその作品に明瞭なる具體的な方向をあつた。これによつて彼は見たところでは渾沌たるアメリカ生活の複雑な構成の下に根本的統一を見ることが出来た。

## 二、新しきヒューマニズム

進歩的小説は政治的變革を取扱ふ小説ばかりではない。靜的構造としてよりも寧ろ變轉發展する過程として社會を表示する

ところの凡ゆる書物は、少くとも或る意味に於いては、進歩的なのである。例へば、「萬人の路」(The Way of all Flesh) はかゝる小説であるが、「パアチニスター塔」(Parolter Towers)はそうではない。併しながら、現今この種の小説は大に政治的傾向を有してゐる、と云ふのは吾々の時代の根本的變化は政治經濟に於いて惹起されつゝあるからである。是等の事を無視することは現實を無視することであつて、それは小説家にとつては不幸なることである。

ドストエフスキイ(Dostoevsky)、コンラド(Conrad)、ロレンス(Lawrence, D.H.)は、社會から隔離した最後の場所<sup>レ</sup>で只運命と機會と海に凭りかゝつた男女を描き、狂氣や自殺の不可避な限りなき終結との抗争を超自然的な鬭争の遠き圏内に高めた。かゝる崇高なる領域から一般世界に轉じて、進歩的小説は、私人的個人的な觀察から政治的社會的な觀察に再び位置を變へ、社會的變化に依つて新しい人間の創造に取りかゝつてゐる。その目的は、個性の廢棄でなしに、個人が始めて環境の支配者として眞にふさわしく頭張る社會の創造である。それは大衆に失業と貧困とを與へる人や文化を破壊する人とは妥協しないであらう、と云ふのは小企業家が驅逐される世界では人間は自由を奪はれ、文化破壊主義は人間を獸的にする。進歩的小説は階級のない社會の創作を自ら提示するであらう、その社會に於いては、人間は遂に抑壓から免がれ自己に相應しい世界の創造へとその全精力を向けるであらう。

現代文學は多く著者の細些な憎惡心や皮肉根性から生じてゐるから非常に不愉快である、かゝる著者は苦痛を受けたといふ理由で世間を決して宥免することが出来ないものである。偉大な文學が生じるのは世間に遣恨を晴らさうとする欲求からではない。進歩的小説は人間の關聯を一層大きく理解することに貢獻する程に、總ての淺薄なる冷笑主義と空想的な無益な鬭争をもつた當代ブルジョア小説の上に於ける一つの進歩にすぎないであらう。實際、人間の精神の最も立派なプロダクションの特徴を表はしてゐるあの豊富な、あの力強い、あの廣範な同情<sup>シレパイク</sup>を作家たちが小説に回復するのは只新しいヒューマニズムの根據に於いてである。

### 三、反戦とドイツに於ける變革

一九一四—一八年の如き大悲劇が少くとも一人位の偉大な作家の作品の中でものを言はなかつたとしたら實際奇妙なことであるだらう。この問題を取扱つた小説は枚擧に違がないが、最も優れた戦争小説としてはア・リ・ベルビユースの「砲火」がある。初期の「地獄」の惱まされた不確實性から、彼は社會的不正と戦争に對する熱烈な抗争の中に生活の意義を漸次發見するに至つた。彼はフランスの汚ない塹壕内で彼の小隊と共に生活し、兵士たちの日々の苦痛をわかつて、彼は兵士たちの爲に人間を愛し理解するに至つたもので、彼の見事な「砲火」はこのヒューマニティ入門の記録である。それは單にその火の如き熾烈性のために偉大であるのみならず、自己憐愍、軟弱な人

開洞察の皆無によつて偉大である。全書が電氣の如くダイナミックな力と光輝に震へてゐる。この種の他の小説には到底言ひ得ない程の多分の確信を以つて、これは戦争だ!!「人々は虜龜の様に泥と粘泥と尿と恥づべき汚物の中に沈み、世のガラクマ山で腐敗し、共同納骨堂にゴチャゴチャになり、そしてウナされてゐるやうに毎日起きてゐた」と吾々は言ふことが出来る。斯様なものを戦争の實體だ。兵士たちは漸次無知の泥を拭ひとり、ヤツと痛ましく彼等は悟る、自分等の本當の敵は欺かれたドイツ労働者の群ではなくて、本國で錦をまとつた支配階級や資本家、大小の投機業者に、僧侶達であることを。彼等のために數萬の人々が盲目的に殺し合つてゐる。バルビュースはこの作品の中で、數百萬の兵士たちの心底の思想感情を全世界に表現した。戦争以來彼は、ルソーの人間的な情熱とポルテールの火山の如き焰をもつて、戦争へと導き、大多數の人民を畜生扱ひにしたり家畜に變へたりするところの全組織の暴露に彼の生涯を捧げた。

變革はドイツにもロシアにも訪れた。辛酸を嘗めた人達は皆な自分達の仲間によつて逐げられた偉大な解放のニュースを知りたがつた、が彼等の支配者たちは周到であつた。併しロシアの外に資本主義の戦争政策反對の火の手が歐洲の他の何處よりも一層高くドイツに上つた。そして、戦争の終結とヒットラー及び經理監の反對革命の間の年に、他の何處よりも更に強い更に尖鋭なる人類解放のための武器に小説が鍛へられたのはドイツ

ツである。ハインリッヒ・マン (Heinrich Mann) / ルードウィヒ・マン (Ludwig Mann) / テオドール・マン (Theodore Mann) / アンナ・シエゲル (Anna Seghers) 等の作品は廣く英國に知られてゐない。實際に、彼の兄弟のトオマス・マン (Thomas Mann) より遙かに重要な作家であるハインリッヒ・マンの最も優れた小説は、アンナ・シエゲルの作品と同じく、まだ翻譯者を待受けてゐる現状である。ハインリッヒ・マンは始めから彼の時代の社會を眞實に廣闊に描寫しようと企てた。その結果として彼の優れた作品は共和國の成立まで檢閲官によつて壓迫された。彼の小説は十九世紀の末期より戦争直前までの新たに得たる俗悪な繁榮にあつたドイツを示す。彼の「華胥郷・バルリム」(Berlin: The Land of Cockayne) (一九〇〇) はドイツの都會生活を明瞭にリアリスチックに描いた最初の小説であつた。「臣民」(Der Untertan)、「貧窮なる人々」(Die Armen)、「君主」(Der Kof) は、プロレタリア、中産階級、帝國主義支配階級の生活の一大パノラマであり、崩壊と道徳的頹廢とが戦争前のドイツ資本主義社會の堂々たる外觀の下で痲痺の如くに既にジリジリと進んでゐたことを呈示し、新生活が既に庶民から押し上げられつゝあつたことを指示してゐる。發表當時は文化への侮辱と見做された是等の作品は、ドイツを没落の閑際に導いた支配者たちへの戦後の反動が起つた間に甚大な影響をあたへ、作者マンは共和國の榮譽ある一員となつた。併し、ナチスの出現で、ハインリッヒ・マンは、ボルシ

エ、ヒストの應接室と非毀せられ、大多數の作家たちと一緒に追放せられた。

#### 四、ドイツ及びインドに於ける作家

文化の破壊者は何を爲したか？ 數千の貧窮ユダヤ人たちは殺戮され拷問に生命を奪はれたけれども、ユダヤ人の大銀行家大工業家たちはまだ安泰に活動してゐる。知識人は殆んど襤褸をまとひ集中收容所で瘦衰し、六百萬の失業者はまだいくらでも飢え、三千萬の勞働者は、少くとも現在、彼等の要求を叫ぶことさへ出来ない程にも實際に箝口されてゐる。然るに一方では是迄決して經驗したこともない様な軍備費の下に全國は呻吟してゐる。もし文化の破壊者がキャピタリズムの弊害から國民を救ふことが出来ないならば、彼は少くとも國民を殺すことになるかも知れない。バルダア・オルデン (Balder Odén) の「暗黒の黎明」(Dawn of Darkness) は、ナチの革命が一九三三年の秋ベルリンの生活の上に野蠻人の崩雪の如く襲ひかゝるのを示してゐる。それはまた、支配者になる以前ですら如何に文化の破壊者たちが「上から」の厚い支持と實際の保護を享受したかを語る。オルデンの書は、單にその立派な人間の性格描寫や一九三三年のベルリン生活の眞に迫つた再生のためのみでなく、ナチ黨一明かに著者は曾て特權を附與されたメンバアであつた一の内部活動を著者が明確に通曉してゐたといふ故に特に價值がある。

ナチスの最も獐猛なる憎惡が注がれる囚人の階級は教養のあ

るコミュニストであつて、彼等の怒はそれが無力であるが故に一層殘虐であり、拷問することも生命を奪ふことも無能にすることも出来る。しかし如何なる恐怖もドイツのコミュニストの勇氣を壓へることが出来ないらしい。數ヶ月或は數ヶ年の投獄や集中收容所の生活後に、又、ファシストから精神も神經も肉體も破れんばかりに殘虐な暴行をうけた後に、ビューマニテイのために是等の英雄たち一ファシストの暴漢とは異つて、全く普通の謙遜なる男女たち一は再び彼等の進歩的な仕事に眞直に戻つて行く。

年若い掃除人の一日の生活を物語るムルク・ラッ・アナンド (Milk Raj Anant) の「不可思議」(Unoufahle) は、直截眞實にこの種の仕事を取扱はんとした最初のインドの小説である。それはまた如何に英國の占領が無意識にインドの全社會機構に變革を齎らしつゝあるかを示してゐる。アナンドの次の小説「苦力」(The Coolie) は「不可思議」よりも遙かにアンビシャスな作品である。この作品は人間同士の仲間氣質といふものが實に貧窮な人達の間にのみ存在してゐる世界に吾々を連れて行く。絶望の中にあつて、彼等共有のヒューマニテイだけが彼等が所有するところの總てのものである。上層階級には知られない素朴な麗しい人情の花がかゝるドン底に咲いてゐる。

「不可思議」と「苦力」とはインドが現代作家に提供してゐる殆んど未踏の豊富な材料を利用しようとした最初の重要な企とも言ふべきものである。

## 五、英國に於けるプロレタリア小説

現今の家庭即ちブルジョア家庭は資本及び私有収益に基礎を置いて居り、家庭はブルジョアジイの間にのみ完全なる發展形態として存在してゐる、と資本論の著者は述べてゐる。資本がなければ何等の確固たる家庭生活もあり得ないといふことは十分明瞭なことである。子供達にとつては幸にも、不景氣のなめに、大人たちと同様に娘たちも、自分達の生活費を稼ぐために社會に現れつゝある、そしてその生活上の經濟的勢力は父親の獨裁を著しく殺いでしまつた。中産階級の娘たちはもはや宏壯な家屋の隔離された薄暗ガリの中に忍び歩いてゐる青白い陰影ではなくなつた。然も尙、娘たちにとつては殊に、中産階級の家庭はまだ全く恐ろしいまでに存在して居り、もしファシズムが制縛するならば女たちは、獨立と人間としての總ての權利を奪はれて、人間を生む器具の地位に今一度還へされるであらう。

「アルビオンの娘達」(Daughters of Albion)に於いて、アレック・ブラウンは其處まで企てられた現代イギリス中産階級の家庭生活を最も詳細に分析することによつて偉大なる小説を著した。ロージャ・エツチャムの家庭。イレレーヌを中心とする小説のアクションが集中してゐる。彼女は五人姉妹の中で最も勇氣があり、リアリスチックである。同性性慾者の小壯外交官との結婚を拒んだため、彼女は、タイビストたちの生活を破壊させながら恬然としてゐる父親から家を逐はれた。スラム街の

下等療養所で彼女は、自分の父が娼婦に墮したタイビストの一人に出會ひ、女の部屋で暮すやうにと勸める女の招きも斷つて仕事を求めて無益に街々を歩き始める。結局、金のために男と結婚する不現實な娼婦よりも寧ろ、イレレーヌは資本主義社會では身動きもとれなくなつてゐる總ての女たちの途を進み、父の捨てた娘と一緒に、神に伴らない娼婦として立ち上つた。

「フォルサイト家物語」(The Forsyte Saga)で諷刺された中産階級の生活批判を、豊富な詳細と正確な分析をそへた「アルビオンの娘達」に於いて、アレック・ブラウンは恐れもなく論理的に結論してゐる。彼によつてなされた多くの點、特に中産階級生活の偽善と無益の息苦しいセンスは、現代に於いて最も申分のない小説家の一人クリフトフ・アイシャーウッド(Christopher Isherwood)の「鬻書」(The Memorial)に一層有効に表現されてゐる。勿論、「アルビオンの娘達」はもつと堂々たるスケールに設計され、正當な力強いその分析を呑むことは出来ない、雖も、そのサイズは興味を或る程度ボヤケさせてゐる。

ロマンチックな進歩的小説の最も興味ある作品の一つは、ジョン・ノアフィールド(John Gower)の「勞働祭」(May Day)である。彼は彼の時代の最も優れた文學的影響を吸収したが、是等の性質が進歩的觀察力によつて強化され方向を與へられたことは注目すべきことである。ジョイス(Joyce)やバアヂニア・ウルフ(Virginia Woolf)によつては無秩

序な彷徨感覺を産むことのみを協力した詩的象徴主義も、ソマアワールドに於いては、現在のロンドンの數百萬住民に現れてゐる通りに適應した廣い生活を描くことに貢獻してゐる。

ドス・パソスの「マンハッタン・トランスファ」の如き詳細を盡したるリアリズムはないが、然も尙「勞働祭」は階級闘争の統一的原则にその多方面を關係させることによつてロンドンの明かに渾沌たる生活を構成してゐる。彼は吾々に完全なるロンドンの生活をあたへてゐる。陰氣な勞働者の街々、天鉄羅屋の鼻モチならぬ臭氣と混淆したレールの鐵の響、犬に汚された舗道を疲れたやうに散つて行く紙屑、石蹴遊戯や街燈を繩で揺り動かしてゐる子供たち、不潔なカーテンの窓から乗り出してゐる自墮落な女達、貧困のヌツバイ臭氣と扉から流れ出した猫の小便が暗い階段に溜つてゐる埒に數百萬の勞働者が一日の勞働を終へて舞戻り横になる。プチアルの幸福な小綺麗な郊外の街、中産階級の町の廣場は立派な鎗懸の木で爽かに冷しく、黄昏には鶉は歌ひ雨後には濡れた土すゞしくかほり、富豪の住宅地は富の嚴肅を以つて森閑としてゐた。

二十世紀の最初の十ヶ年の豊富なる小説の製作の見通しがついたとき、ルイス・グラシニック・ギボン (Lewis Grassie Gibbon) の三部作「スコットランド合唱隊」(Scots Quair) はその時代の最も注目すべき成就の一つとして挺立するものであらう。その生氣、その伶俐なる才智、その調子の整つた自然的な詞は、この作品に永い生命をあたへるものである。この三部作

のうち最初の「落日の歌」(The Evening Song) は最も優れた作品であり、戦前のスコットランド山地の小農小作人の生活を改造してゐる。次の「雲立てる谷」(Cloud Tower) に於いては紡績工は大部分ジャジャ馬にすぎず、町の人々の行爲は外聞の悪いゴシップを経て述べられた。第三の作「灰色のグラニット」(Grey Granite) を以つて、ギボンは民衆の生活に喰ひ入らうと決心した、併し彼がシエゲットの紡績工たちと親密でなかつたやうに、ゲンケアンの鋼鐵工たちとも親密でないことは明かである。彼にとつては、彼等はその生活條件によつて全く殘忍にされた只教養のない不法な人間である、然るにコミュニストの指導者トリーズのスケッチは餘りにも明かに風説から描かれてゐる。確かにギボンの同情は彼等にある、そして「灰色

のグラニット」の力は徹頭徹尾悲慘の極にあるスコットランドの工業町に於ける階級闘争の暴露に在る。その強硬なる憤懣、社會闘争の問題とのその大膽なる組打、その見事な諷刺の閃にも拘はらず、またギボンの性格描寫の凡ゆる力―それによつて人物は甚だしく濺瀾としてゐる―にも拘はらず、「灰色のグラニット」は大きな成功といふよりも寧ろ大膽な企の域にとどまつてゐる。この成功を望むにしてはギボンの生活に對する知識は充分ではなかつた、それで「スコットランド合唱隊」の最高潮は「落日の歌」の輝かしい發端を持ちながら不十分である。併し彼の三部作は吾々の時代には類のない三つの異つた面を持つたスコットランドの生活のパノラマである。

## 六、ロシアの復興

廣範圍の知識階級専門階級は新しい生活を獲得せんとして農民や勤勞大衆と結びついたところの一九〇五年革命粉砕後、ロシア文學は冷笑主義とヒステリカルな絶望時代に陥つたが、人間改造に向けられたこの新しい生活は既に文學に現され、その大膽、その生氣、その樂觀的氣質はロシア以外の諸國の現代文學に鋭く對立してゐる。ソヴェエトの多くの小説より引出す感情は、際限のない精力、自信、希望といふ爽快なるものである。併し、奴隸の如く制度に對する批評眼のない作家たちもソヴェエトには二、三あるが、實際には、カチーフ (Kataev) の「私費者」(The Kimberlers) と「オ、時よ、進め!!」(Forward, O Time)、シモロホフ (Sholokov) の「開かれた處女地」(Virgin Soil Upturned)、シラフロン (Glazkov) の「セメント」(Cement)、ロキイオノフ (Rodionov) の「チョコレート」(Chocolate)、レオノフ (Leonov) の「愚人」(Sot) の様な書物の中の、又就中ミカエル・ゾオスセニコフ (Michail Zoshchenko) の痛切な小品の中の、專制下では決して出来ない様な無遠慮な大膽な批評は再三人を感動させる。

シモロホフの「開かれた處女地」はデスパレイトな貧農と些細な米邑と封建時代からの遺物である子供らしい迷信を持つた富農 (Kulaks) との渾沌たる昔のロシアが集團農場の社會主義經濟に讓歩するのを示してゐる。それは農民生活の何んとか妙な表現でまらう!! 何んといふ確實な把握でまらう。シモ

ロホフは豊富に人物を取扱つてゐることよ!! 彼は確に機械崇拜者ではない、併し動物や土地に對する彼の愛は、ロシアの廣大な地面は現代の科學的方法によつて最も有利に耕作され得るのみならず、牽引車は牛に牽かれた晝趣に富んだ昔の木製の犁に取つて代らねばならないといふ事實を彼に知らせてゐる。

カチーフの「オ、時よ、進め!!」は五ヶ年計劃のテンポを反映した優れた小説である。迅速な映畫的手法と、比較して見れば暫時他の小説を平凡に見えさせる鋭い燦然たる光輝とをもつて、それは勞働が吾々のスポーツと同様の熱狂をエクサイトする國に於ける産業的主題の非凡な幻想曲として描寫されるかもしれない。カチーフの作品には一種の陽氣と快活とがたつてゐる。

不幸にも、カチーフの様に容易には、新しい環境に應ずることが出来なかつた二、三の作家イリア・エレンブルグ (Ilya Ehrenbourg)、ボリス・ユルニヤク (Boris Phiyak) に著しく相違して、マキシム・ゴーリキイ (Maxim Gorki) の例は尙更に著しいものである。革命當時老年に近かつた彼、ヨーロッパで大評判の彼、トルストイ (Tolstoy) やチエホフ (Glazkov) と友達であつた彼、ゴーリキイはロシアの以前の作家たちのうちで殆んど唯一人の進歩的小説家として、再び生活を始めるに充分なプリシナルと活氣とをまだ具備してゐた。

國を出てヨーロッパの都で老後の安樂と安全とを求めた代りに、彼は若者の熱情を以つて彼の國の再生に心魂を打込んだ。彼程廣く愛され尊敬された作家は無いだらう。彼は將に起らんとする新文學の父である。